

安南の王子・その一年

他六編

山川方夫



旺文社文庫

「旺文社文庫」刊行のことば

いかなる時代においても、書物は人間の最大の喜びであり、最高の救いである。若い日読んだ書物は、人間の生涯にわたって影響をあたえ、第二の天性となり、人格となるであらう。

かかる観点から旺文社は、若き世代のための出版社としての使命感にたつて、ここに旺文社文庫を刊行する。内容は、洋の東西にわたり、時代の古今をつらぬき、文学・科学・伝記・随筆・思想、万般におよび、いやしくも知識人たらしとする者が、生涯の教養の基盤として、若い日一読すべき価値のあるものを可及的に多く刊行せんとするものである。

読むに価値あるものを、でき得るだけ楽しく、消化しやすく、読みやすく提供することは出版社の義務である。出版道義を強く信奉せんとしているわが社は、この目的にひたむきに献身するものである。あえてわが社の志を理解されご支援あらんことを。

旺文社社長

赤松勉夫

〔編集顧問〕 小田切進 茅 誠司 木村 毅
中島健蔵 森戸辰男 (五十音順)

旺文社文庫 安南の王子・その一年 定価はカバーに表示してあります
他 六 編



昭和48年12月10日 初版印刷
昭和48年12月20日 初版発行
著 者 やま かわ まさ お 夫
発行者 鳥 居 正 博
印刷所 口之出印刷株式会社

発 行 所 株式会社 旺 文 社

162 東京都新宿区横寺町
電話 東京 (03) 267-1111 〔代〕

(中村印刷・穴口製本)

落丁・乱丁・不良本はお取り替えます
書店または本社に直接お申し出ください

0193 | 611-39 | 0724

810098

© 旺文社 1973

(許可なしに転載、複製することを禁じます)

旺文社文庫

安南の王子・その一年

(他) 昼の花火・煙突・春の華客・猿・
月とコンパクト・夏期講習

山川方夫 著

旺文社

目 次

安南の王子

五

昼の花火

四

煙突

七

春の華客

九

猿

三

月とコンバクト

一七

夏期講習

一五

その一年

二七

解 説

坂上 弘

二七

代表作品解題

二九

年 譜

三三

挿絵 山野辺進

本書は、冬樹社版『山川方夫全集』（全五卷）を底本とした。ただし、多少ふりがなを加えて読み易くし、適宜傍注をほどこした。

（編集部）

安南の王子

かれは名を仁と言った。身についた品位のためにひとびとはかれを王子と呼んだ。皇太子よりもかれは王子に順応^{ふさむ}しかなかった。

かれは日毎判で捺^おしたように同じ時間にホオルにあらわれてクラリネットを吹いた。だからひとびとはかれを勤勉で律気な青年だと言った。かれはいつも好みのいい良い仕立ての背広をいかにも無難作に着こなしていた。だからひとびとはかれをシックだと言った。かれは寡黙^{こくもく}だった。だからひとびとは、かれをいまだきの若いものにしては出来すぎた落着いた男だと言った。

だが、かれはなまけものだった。このうえないめんどくさがりやだった。毎日のバンド出勤はかれの生活の——つまりはかれの懶惰^{あだ}の唯一のかたちだった。服は毎朝幼児のように洋子が着せた。そのお人形遊びに似た丹念な凝り^こりようにかれはいっさい関知しない。(一言でいえば、いま、仁は洋子のつばめ^{つばめ}だった)かれの寡黙^{こくもく}は、ただに口をきくのが億劫なためにすぎなかった。

悠揚^{ゆうよう}迫らぬかれのぐうたらは鷹揚^{おうよう}と見あやまられた。その沈黙がおっとりした人品の良さを示したように。そして、……そしてかれは美しかった。背こそ高かったけれど、四肢だけが急速にチグハグに発育した感じの、単彩でみずみずしい雄^おの媚めかしさが支配する二十才のかれの肢体と、拳措^{けんそ}には、稚^わい牡鹿の敏捷な清潔さが香った。(しかし、よく見ると、かれの動作はまったくだらしないのだった)青い白墨でいたずらしたあとみたいに血管の透けた華奢^{きやしゃ}なすんなりした手足、白いす

べすべした肌、ほのかな淡紅いろに染った頬を蔽う緻密な生毛は、神話の少年のそれのように、かれの顔の輪郭を金色に暈かし出した。少女のように睫毛の深いところもち茶色の瞳と、細くお白粉を刷いたような鼻すじ、そして花びらのような唇があった。

洋子は、仁を少女歌劇の男役のだれよりも男らしいとほめた。

ぼくがこれから語ろうとするのは、この王子を主人公とするお伽噺である。だけど、この王子はいまぼくらの住んでいる時代に住んでいる。……ぼくは最初に仁の属していたバンドの人々——すなわちかれが王子として君臨した王国の人々をまず御紹介せねばなるまい。

マスタアはKと言った。マネエジャアでピアノも兼ねた。二十一なのに総入歯で、大声で笑ったり怒鳴ったりするたびごとに、鼻の下を猿みたいにふくらませてでもどもぞと舌尖で入歯の位置を直す。そしてから、にっと羞じたように笑う。あどけない可憐な笑いであった。「スマアトで目先が利いて几帳面、負けじ魂これぞワタクシ」というモットオを持ち、海兵出身で陸士出身で一高を出たと自称した。老けて見えるので相手によって出身校を替えて応待することになっている。あきれかえるほど知友が多かった。一種の才能で決して話題には事欠かない。もちろん戦争など行くはずもないのに、ニュウギニアの基地で航空参謀をしていたそうで、かれの自爆の経験はそのときの機嫌によって十回から卅回のあいだを往復する。二百メートルもあるゴムの樹の梢にひっかかったま

(1) もと海軍の下士官・兵の略称。(2) 陸軍士官学校の略称。(3) もと第一高等学校、現在の東京大学の前身。ともに当時の出世コースの最先端として知られる。

ま、まる三日間頑張つて、ついに発見された僚機からロオプで救いあげられたという。大真面目な話である。「しかしさすがのぼくもだね、宙吊りのまま機は五百 糎^{キマイトル}の速度で飛んどるんだ。これにはやはり息切れがしてね、疲れた。況^きしてまる三日の断食だ。手から力が消えて行く。もう駄目だ。アワヤ、手を放しかけた。放した。……そしたらだ。その刹那^{せつな}だ。上からぐっと塔乗員の腕がのびて、そしてぼくはあやうく九死に一生を得たんだね。うん。ちょうど十八回目の命拾いね。それが」この勇壮で頬笑^{ほえ}ましい逸話の持主は、(一度某出版店主が戦記物を書いてくれと頼みに来た事実がある)こと金錢に関しては異常に抜目のない巧^{たみ}な技倆があつて、かつて損はしたことがない。奇譚^{きたん}もその資本の一つであらう。しかもかれの嘘^{うそ}には全く含羞^{がんしゅう}がない。これは人徳というべきであつた。

シンガアの洋子は、匿^{かく}しごとのできないおちちよこちよいを自称し、外貌にあばずれの資格をそなえていた。幼いころ、サアカスの女団員にあこがれて二ヶ月のあいだ欠かさずお酢^すを日に二合五勺^{ごう}ずつ飲みつづけた。多少骨が軟くなつたそうである。そのせいでもあるまいが彼女は皺枯^{しわこ}れ声^{こゑ}が得意だつた。つねにだれか年下の男に入れあげていなくては生甲斐^{せいがい}がない。(最近外国のある女優にその同類を発見し、狂喜して自信した)全身を灼^やく愛の、禱^{いの}りにも似た呻^{うめ}きによつてのみ芸術は美事に花ひらくのだそうだ。日に三回ほど「歌なんでもそんなものよ」と何気なくそういう。そういえば洋子の歌はラブ・ソングにかぎられている。いまは仁にうちこんでいた。仁の面倒を見ることに彼女の生活はあり、仁によつて彼女の生命は保たれていた。だけでも、それも洋子の気まぐれや「浮氣」を否定するものではない。いくら「それ^{セ・トウジュウル・ラ・メム・シヤンシ}がお決り文句」とはいつても、ひとはいつも

同じふしでばかり歌うわけのものではないのだから。

最年少十八才のギタアのHはたいへんなモオド狂で、つねづね日本人でいちばん先にアロハを着て銀座を歩いたのは俺だと喧伝していた。唯一の誇りである。いま着ているグリーンのシャツは正確に都電の緑いろだ。これは胸の中央に銅^銅が三つならんでいるだけの怪体^{けうたい}なもので、かれがみずからミシンを踏んで縫ったのである。小器用でダンスが巧く、アメリカで絵描きをしている異母兄の紹介で、近いうちにフレッド・アステアとジンジャ・ロジャアスにダンスを習いに渡米するそうだ。気早な小心者で、すでにかれの名刺の裏には紐^{ニュー}育^{ヨーク}の番地^{アドレス}が刷りこまれてある。なあに日本なんてアメシ^イン^ンだけで食えらあな、という兄貴の説に共感しているが、現在必死に柔道を稽古^{けいこ}している。それでまずアメリカで食う胆^{はら}らしい。道場への往復のバスのなかで、かれが毎日せっせと自らのデザインにかかるネクタイを編んでいると、或るお節介者がわざわざ報告しに来了。

Mはバスだ。鉄縁の眼鏡をしている。近眼で乱視で斜視で色弱だという。青白く、鼻が曲ってて文学青年みたいだと言われるので、そうでなければならぬように長髪にしてときどき原稿用紙を前に煙草^{たばこ}をふかして夜を徹する。古今東西の全芸術の出店みたいな容子で、こと芸術に關すればいつでもしゃしゃり出て意見を陳^のべないと気が済まない。しかし、いつかランボオ風の旧式の背広に凝って以来、「本質的に」詩人をもつて任じた。もともと投書癖があつて、身の上相談（もとより自分を悲しい境遇の娘に仕立てて書くのである。これは詰将棋とは逆で、あまりに完璧な悲惨さを設定すると婦人雑誌はのせてくれないそうだ）、噓クラブ、話の泉、宣伝歌詞の募集などに専門に

(1) 「ちよつとの間だけアメリカへ行って来た」という意味のスラング。

応じていたこともあったが、日曜娯楽版に凝りすぎてむつかしい顔になり、鬱々として酒瓶蒐集家に転向した。やがて、かれの苦悩がかれの空腹と密接な關係を有するのを発見していたく感動し、早速精魂をお料理に傾けるにいたった。が、Hに縫ってもらったエプロンをかけ、婦人雑誌の附録を見ながらみずから腕を揮った御馳走によって、かえって味気ない満腹にかえるのにくさり、これを「悪循環」と名付けてひとり気を霽らした。ノオトにはこう記している。『悪循環——料理するたのしみは吟味と調理とに尽きる』

いつも物憂げな瞳で、影のように音もなくグルウプのあとを偷しげについてまわるおどろくべきつきあいのいい男である。

ニグロに似ているドラムのS、これは教祖であった。

煙草の眞實を吸いあてるのの權威である。最近ハマ元帥の解任を一月前に予言し、ひとびとに大きな驚愕と畏怖とを与えた。ばらばらと撒いたトランプのカアドのうえに、初恋の人の名を書いた紙をまるめて落させ、その方向でその名と現在の境遇を当てる。いちど洋子の初恋の人を当ててより、皆から深くおそれられている。神憑りみたいな瞳や分別くさい顔とともに既知の宇宙を持っていくのかのごとくだ。なにごとによらず一家言を有し、半眼になって重々しくそれをお告げのように宣告する。かれの過去については鹽光尊といっしょに九州で滝に打たれたこと以外は、全く知られていない。年齢もわからない。俺の予言が適中するのは俺が健全なる常識人である証拠じゃないか

(1) マッカーサー元帥。一八八〇—一九六四。アメリカの軍人。日本降伏後、連合国軍最高司令官として日本占領に当たる。一九五一年四月朝鮮戦争処理問題で解任。

(2) 第二次大戦中に出来た小教団、呪字教の教祖。

と威張ってるが、夕方、生玉子を二つ呑んで、今日はカロリイ充分なのに、と腹の空⁺くのをいぶかしがる男である。とまれ、かれの一を聞いて十を知ったと信じる得体の知れぬ才能はめざましい。この教祖の教祖としての玉の瑕^{きず}はかれが女でないことにあった。

かれらは都合によってなんでも信用したけれど、かれらにはなんの絶対もなかった。自然かれらには方針もモラルもなかった。いま紹介したかれらのアネクドット¹も、当人たちすら本当か嘘かを知らないだろう。くりかえしすぎて信じてしまったようにも見えるが、ただ平然と日時や場処人名などのデテエ²ルスを間違えるので、それが絶対のものでないことがわかる。

いくら方針がないと言っても、なにか生きる言訳^{うしな}けがないと存在意識を喪うほど退屈なので、かれらはどんな悪いことでも、どんな善いことでも、目前のことを手当り次第に平気でした。選択とは趣味の選択ではない。しかしかれらが一樣に一人前の悪事を働かなかったのは多く偶然性によるものである。かれらが捕らなかつたのは、偶然と、かれら以上のいわゆる「悪党」をおいかけるのに疲れた日本の警察の粗漏^{そろう}な制度のためであろう。

疑問に思う人もあろうが、かれらはみな一流の家庭の子女なのである。家出なんて角^{かど}の立つことをしているものなんかない。大森のあるアパートの一室がかれらのクラブ・ルームであり、ときどき誰かがそこに住まうが、だれも定住はしていない。現在は洋子と仁が居住していた。

三年ほど前から、かれらは風に吹かれた木の葉のように、いつとはなしにひとところに塊^{あつまり}って、

風の吹くまま仲良く踊ったり歌ったり騒いだりころげまわったりして日を送った。

かれらにはそして自分が行動している自分と全く別なところにいるというほとんど無意識的な確乎とした信念が秘密結社員のように共通していた。かれらはみなどこかにいるそれぞれの本当の自分に信憑しんぴようしていた。だが、それについて語することは、結局自己不信の言葉の堂々廻りめぐるとなるにすぎぬ自覚から、けっしてだれもなにも語ろうとはしなかった。信ずるものには沈黙こそが順応ふさむしかつたのだ。

このような一風変った人々のなかで、仁の存在はみとめられた。かれはこの奇妙な王国の王子プリンスだつた。

ボスのKもそれを認めた。

技術テクニクの確かさだけではない。生れついた氣品を皆の看板にされただけではない。決して人々に逆われない形のない氣体みたいな仁の性質は、いつかかれらを蔽おほってグルウプの空氣に瀰漫びまんし、かつ無抵抗で透명한空氣の遍在のように、王国のひとりひとりに君臨し、清すずしく心愉いしい息吹いぶきさえをあたえたのである。

仁は、だれにも逆わなかった。かれが怒ったり感情的になったのを見た人は無い。頼りないといえど頼りないおよそ感動の欠けた男であった。つねににこにこ微笑たぐいまれしていて、与えられたものに嘗かつて否やを言ったことのない類稀たぐいまれな同調性の王子であった。譬たとえば食事にしてもまずいものには氣がつかない。それでいて美味おいしいものには氣がつかないのである。洵に結構な味覚と言まことうべきだが、こ

れがそしてかれの生活態度であった。夜寝ることは蒲団に入ることだとは思わないので、夏であるが厚い毛布にくるまって眠ってしまった。ほっておけばいつまでも股引ももひきをはいたままだ。脱がしてもらえば、なるほど、さっぱりした哩わい、とは思うのである。黙っていれば床屋にも行かないし、下着も取換えない。仕事はもちろん事務だったが、仁は生活まで事務的にしかなかった。一日の時刻によって仕事を替えるのだけがかれの生き方なのである。つまり、かれは一日ずつしか生きなかった。

人々の言知れぬ畏敬も、そのかれが馬鹿か伶俐りょうりかわからないところにあつたのだろう。だが、身の廻りの世話を焼くのかかりっきりの洋子をはじめ、グルウプの人々には、ものごとの善悪や真偽に興味がないのと同じく、仁は馬鹿でも伶俐でもそのどちらであつてもどちらでなくつたてもよかった。要は夫々に日々が面白く便利に退屈なく痛みなく過ぎればいいのだった。すべては各々の娛たのしみのための利用価値によってのみ量はかられるのである。

そして、……そして仁は面白い男だった。王者を憧憬する賤民のように、人々は無感動で野放図で空気のようになつて恬淡てんたんでつかまえてころのない仁のエゴに発見する夫々の夢に憧れた。皆は仁を好いた。皆は仁を愛していた。

仁というブアカアドがこの鳥合を統一し、ひとつの王国と化した。

学生たちに於ける帽子の存在のように、仁はかれらの象徴的装飾ともいふべき位置におかれた。なまけものの律気ものの恒つねに微笑している仁を、人々はめんどくさく衛まもりながら、なんということもなく看板のように立てて「楽隊屋さん」商売をつづけていた。

そんな気楽なギニョオル①の生活をつづけながら、かれらはこの眠ひんそうな眸まなこをした王子のうちに、各々を操る目に見えぬ糸がつながり把持されているのを信じていた。

この連带的な默契が、このグルウプをグルウプとし、さらにかれらを仁を元首に戴く王国の人々とする同胞愛となつたのである。

たしかに仁は、かれら相互によって経営されているこの特異な社会の王子プリンスだった。かれは王国及びかれらひとりひとりの代表者であり、支配者であり、象徴であつた。

商才に秀でた大蔵大臣役のKは結構自らも儲けつつ巧たくみに金を按配あんぱいした。

皆がそれぞれの役割をつとめることに自足し、互の個人の特権を、健全なるお互の無関心によつて尊重しあつた。

かれらは陽気だった。かれらは言合せたように感傷主義だけを排していた。

馬鹿が結局いちばん気楽なことを、この賢明な馬鹿どもは知っていたのだ。

この国はつねに平穩無事だった。なんにも問題がなさすぎた。時間が重荷なほど、息苦しくないこと影おびただしかった。

ただ一人の女性の洋子を、ときどき彼女の志どおり「共同便所」ふうに使って、ひとと彼女も満足した。愛とか幸福とか自由とかいう他人迷惑で得体の知れぬ言葉は、その危険のために暗黙のうちに人々から忌避され、お互の秩序保持と便利を感情問題に優越させたここでは、なんの不仲も起りうべくもなかった。だれ一人成行きに逆わない。逆ってまですることなどありはしなかったのだ

から。

かれらの足許が宙を歩んでいるように定かでないのは、酔っているせいではない。かれらが「影」にすぎぬためだ。この王国はいつも明るく朗らかで屈託がなく、かれらの日常はその完全で健康な虚無のよく晴れた青空に跳る虚妄の影の舞踏に似た。

そして、……そして一日王子の仁を繞ってこの王国に事件が起きた。

客として招かれたKの識合いのあるブウルジョアの邸に出向くのに、驚嘆すべき附合いの良さでかれらは忽ちに賛同したのだが、洋子さんの趣向もないのは退屈だと言出したのである。

「うん、……じゃあプリンス、ユウ安南の王子さまに化けなさい」

叫喚と拍手と跳躍とで、みなはこの突飛なKの立案を支持してうれしかった。

……仁も拍手していた。

みんなが仁の名付け親を買って出た。

「バオ・ダイ帝⁽²⁾ってのがいるから、バオ・ヒラメはどうかね」

「……バカ・ダイ」

「俺の朋友にホオ・チミン⁽³⁾て奴が……」

(1) インドシナ半島の東岸地方、さらにベトナム人の国家をもさす。
 (2) 一九一四。ベトナム旧安南阮朝第一三代皇帝。一九二五―五五在位。
 (3) 一八九〇―一九七〇。ベトナムの政治家、早くから独立運動に従事、一九四五よりベトナム民主共和国を建て、大統領となる。